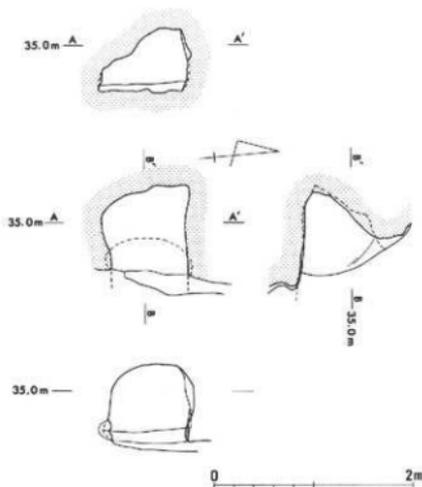


第54図 1502遺構実測図 (1:50)

羨道は玄室全面のほぼ中央に設けられており、高さ100cm、奥行き65cm、幅85cmを測る。床面は平坦でわずかに傾斜がみられる。ほぼ中央に前庭部に向かって不整形な落ち込みがみられるが、排水溝とは認めがたく、岩盤面の剥離と考えられる。羨門部では、10cmほどの段差がつき、前庭部にいたる。閉塞に伴う石材等はいっさい認められなかった。前庭部は、玄室側で幅が80cmをはかるが、長さは現状では最大95cmと、極めて短い。先端部では岩盤が急降下の状態にあり、1号穴を調査中、先端部の岩盤が摂理面から崩落したことを考えると、当初からこのように前庭部が狭かったかどうかは不明である。

加工痕跡は、風化による各面の摩滅が著しく、玄室床面の玄門側に一部縦方向の筋状痕跡を認めたにすぎない。

遺物は、全く認められなかった。



第55図 1503遺構実測図 (1:50)

3号遺構 (1503) (第55図、図版44)

1号穴の左斜め下方、4m離れて位置する小横穴である。凝灰質砂岩の岩盤にうがたれており、標高は床面で34.5mで、1号穴との比高は3.5m、2号穴とは1.5mほどである。開口方向は東方向に向いている。

間口は、幅が下端で80cm、奥行き90cm、高さ80cmほどを測る。中程から奥部にかけての横断面は左下がりとなり、不成形である。

床面の右側と右壁面の一部に掘削工具によるとみられる縦方向の筋状痕が、また、天井と右壁面とのコーナー部分に刺突状痕が認められた。

出土遺物はなかったが、前記の掘削に伴う痕跡が他の横穴墓のそれと類似している

ため、同時代の遺構と判断した。性格は不明であるが、不成形の状態は掘削途中にあったことを示しているように思われる。

4号穴 (1504) (第56図、図版39)

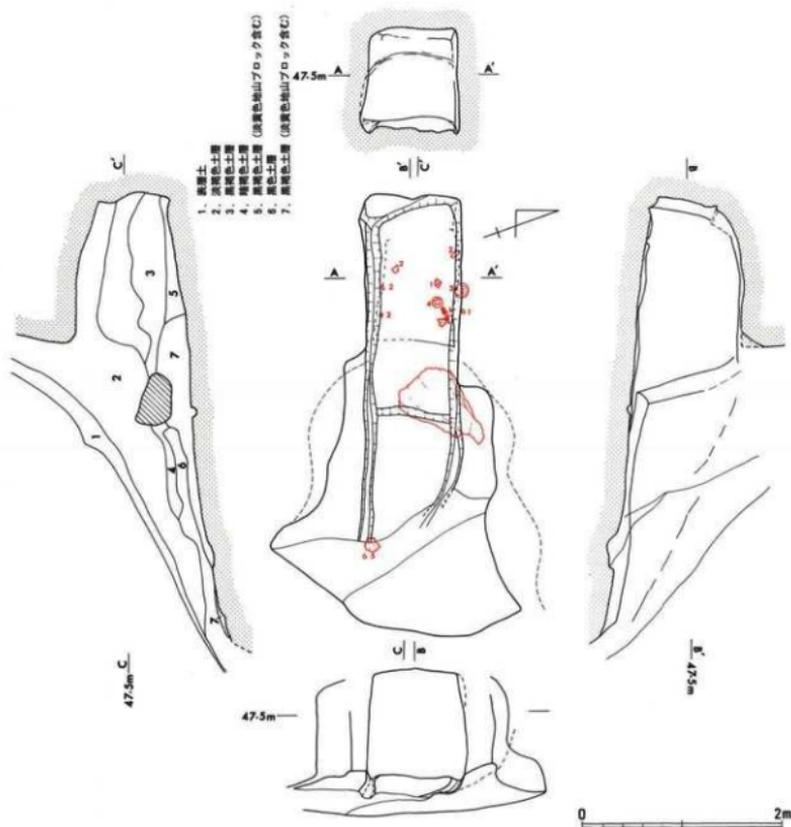
1・2号穴および3号遺構と同じ丘陵斜面にあるが、1号穴から谷奥部(南南西方向)に約30mほど離れて存在する、単独横穴である。いわゆる羨道部に相当する部分は認められず、玄室部、前庭部とからなる単純構造のものである。縦長プランの箱型スタイルの横穴墓で、排水溝を伴う。丘陵尾根部に近い高所にあり、床面での標高は47mである。凝灰岩の岩盤にうがたれており、東南東方向に開口している。

土層堆積状況

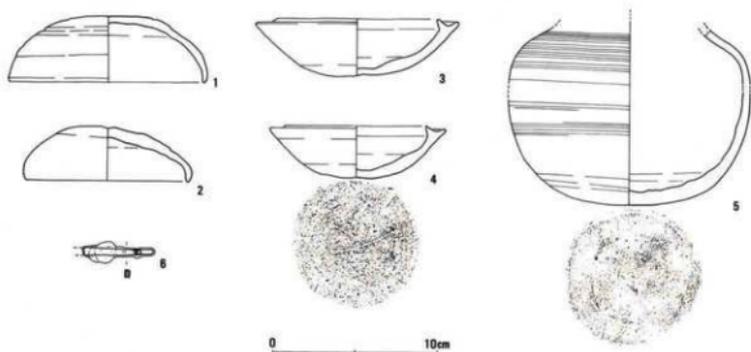
4号穴は、地表の表面観察では確認できなかったが、直下の谷底付近で須恵器小破片を採集したことから、試掘により新たに発見した横穴墓である。表土が全面を覆い尽くしており、前庭部、玄室部ともかなり厚く土砂が堆積していた。土層は上からおおよそ自然流入土である①層、②層、③層が厚くみられ、この直下面で凝灰岩質の石材が数個認められた。このうち大きなものは現状では不整形ながら三角形を呈した切石であり、縦93cm、横62cm、厚さ30cmほどを測る。本来閉塞に用いられたと思われる石材だが、盗掘を受けたものとみられ、前庭部床面から20cmほど浮き、横倒しの状態で検出した。これより下位には盗掘時乃至はそれより以前の自然堆積土とみられる④、⑥、⑦層が認められた。玄室内の⑤層も盗掘後の自然流入土として堆積したものと考えられる。

玄室部

平面は、幅が入り口側、奥壁側とも95cmでほぼ一定しており、奥壁に向かって縦長の方形プランを呈している。奥行きは玄室入り口部分の左右の袖の位置が異なるためにその規模を明確にしがたいが、左



第56図 1504遺構実測図 (1:50)



第57図 1504出土遺物実測図 (1:3)

袖からすると1.7m、右袖からすると1.9mを測る。床面は奥壁側がわずかに高く作られており、壁面に沿って排水溝が巡る。奥壁側ではきちっと壁面に沿っていないが、これは岩盤の摂理面をそのまま利用したためと思われる。この排水溝は、そのまま真っすぐに伸び、前庭部に通じている。左右側壁、奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、ほぼ平坦に成形された天井部にいたる。床面からの高さは、右側面が1m、左側面が0.9m、奥壁で0.7mを測り、玄室断面は方形を呈し、総じて玄室部は箱型のスタイルをとる。玄門に相当する玄室入り口部分は、その左右袖が非対象の位置にある。また、この両袖は、左側が幅15cmほど直角に仕上げられているのに対し、右側は幅20cmと丸みをもたせて広く設けられている。前庭部は、幅が玄室側で1.5m、先端部で2.5mを測り、先端側で広がりをもせる。床面は、先端部に向かってわずかに傾斜するが、ほぼ平坦に作られている。玄室部から伸びる排水溝は、左側はそのまま真っすぐに伸びるが、右側は中央付近で左寄り（南側）に少しカーブする。両者は、前庭部途中にある岩盤のクラック面とともに消失するが、クラック肌がそのまま排水溝として利用されていたのかもしれない。また、奥壁から2.5mのところ、両者をつなぐ排水溝も認められた。

加工痕跡

床面には全体的に縦方向の筋状痕跡が認められた。この筋状痕は天井部にも及んでいた。左壁面の一部には刃幅4.5cmほどの平ノミ状の工具痕が、また、右側の袖部分の下端に刃幅5cm弱の平ノミ状の工具痕がわずかながら認められた。

遺物出土状況

遺物は、玄室内から須恵器4点(1～4)と鉄製品1点(6)、前庭部で須恵器1点(5)が出土している。玄室内のものは、いずれも床面のほぼ直上から検出したものであるが、3・4は完形品として、また1・2は数点の散在する破片として取り上げている。前庭部の5は、左側の排水溝が消失する先端部の床面に近い⑦層中から検出した。

出土遺物(第57図、図版55)

1・2は須恵器坏蓋である。3・4は須恵器坏身とともに完形品である。4の底部外面には「×」状のヘラ記号が認められる。1と3とはセット関係にある可能性がある。5は、須恵器壺の胴部と考えられるものである。胴部外面の1:位半分以上にカキ目がかかるく施され、底部には「×」状の浅いヘラ記号が認められる。6は鉄製品で、断面は四角形を呈している。

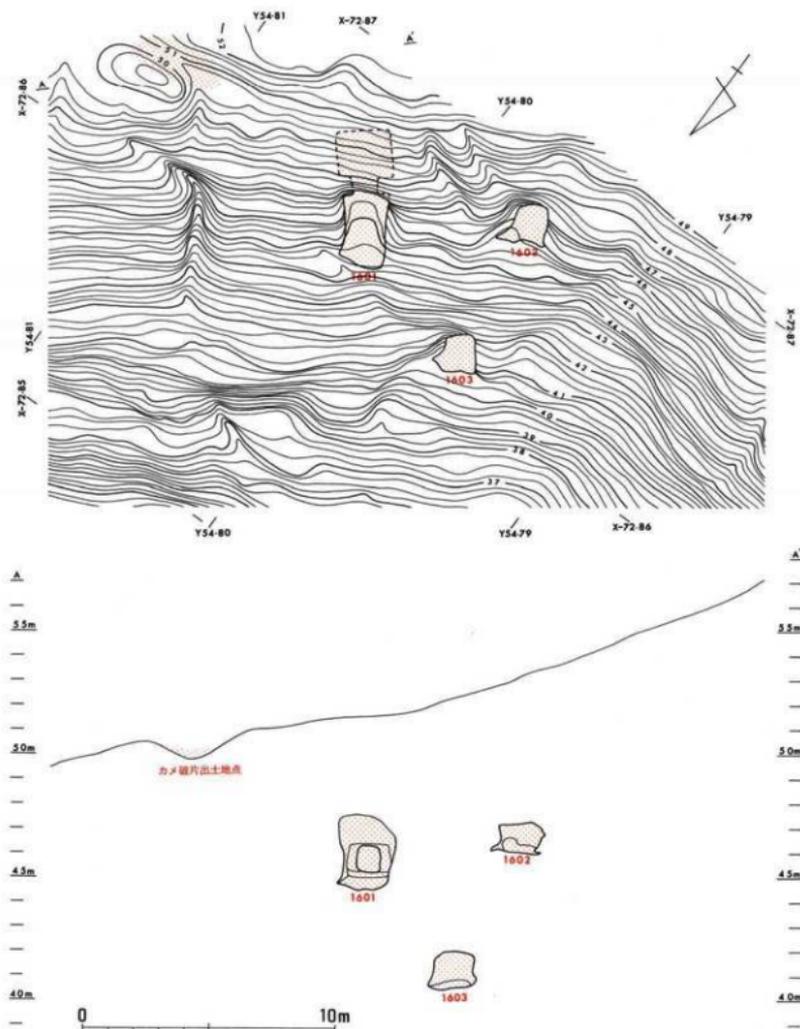
遺構に伴わない出土遺物

15支群が存在する尾根の先端部、2号穴(1502)の正面向かって右斜め上方の地点で(第49図参照)、図示はしていないが、須恵器の要破片を検出した。表土中からの出土であり、加工段のような遺構も認められなかったが、前述の第14支群の場合や、後述の第16支群でも同様なケースが認められたことからすると、横穴墓から離れた丘陵の尾根筋等で、横穴墓の葬送に伴って須恵器を用いて何らかの行為が行われた可能性がある。

VI 上塩冶横穴墓群第16支群

調査の概要

上塩冶横穴墓群第16支群は、大井谷の中程、北東方向に突出する小丘陵の北側斜面に立地する。谷を挟んで同第15支群と向き合い、また、真裏には第17支群が存在する位置にある。従来から知られて



第58図 上塩冶横穴墓群第16支群配置図（平面図、立面図、1:200）

いた横穴墓群で、凝灰岩の岩盤が露出した比較急峻な地形の高所に、1穴(1601)が開口していた。

調査は、同斜面に計21本のトレンチを設けて行った試掘調査の結果を踏まえ、横穴墓を掘削するのに適当と思われた凝灰岩の岩盤層を中心に実施した。調査の結果、丘陵の比較的奥の方の高所にまわって、横穴墓1(1601)と、その掘削途中の段階と考えられるもの2(1602・03)の、計3つの遺構を検出した。1号穴は、盗掘を受けていたが、家形寄棟(四注)式妻入りのていねいな造りのものである。出土遺物は、1号穴から須恵器類を検出し、また、遺構に伴わないものとして尾根筋で須恵器破片を認めた。調査総面積は、約2,060㎡であった。なお、調査の最終段階で第15支群ともあわせて縮尺100分の1、25cmコンタによる空中写真測量を行った。

1号穴(1601)(第59図、図版42・43)

整美な寄棟(四注)式家形妻入り形式のものであり、玄室平面はわずかに横長のプランを呈する。前庭部、羨門部、羨道部、玄室部からなり、排水溝は認められない。第15支群と向き合う丘陵斜面の尾根筋近くにあり、真裏には第17支群が存在する。凝灰岩の岩盤に穿たれており、北西方向に開口する。標高は、玄室床面で45.4mを測る。

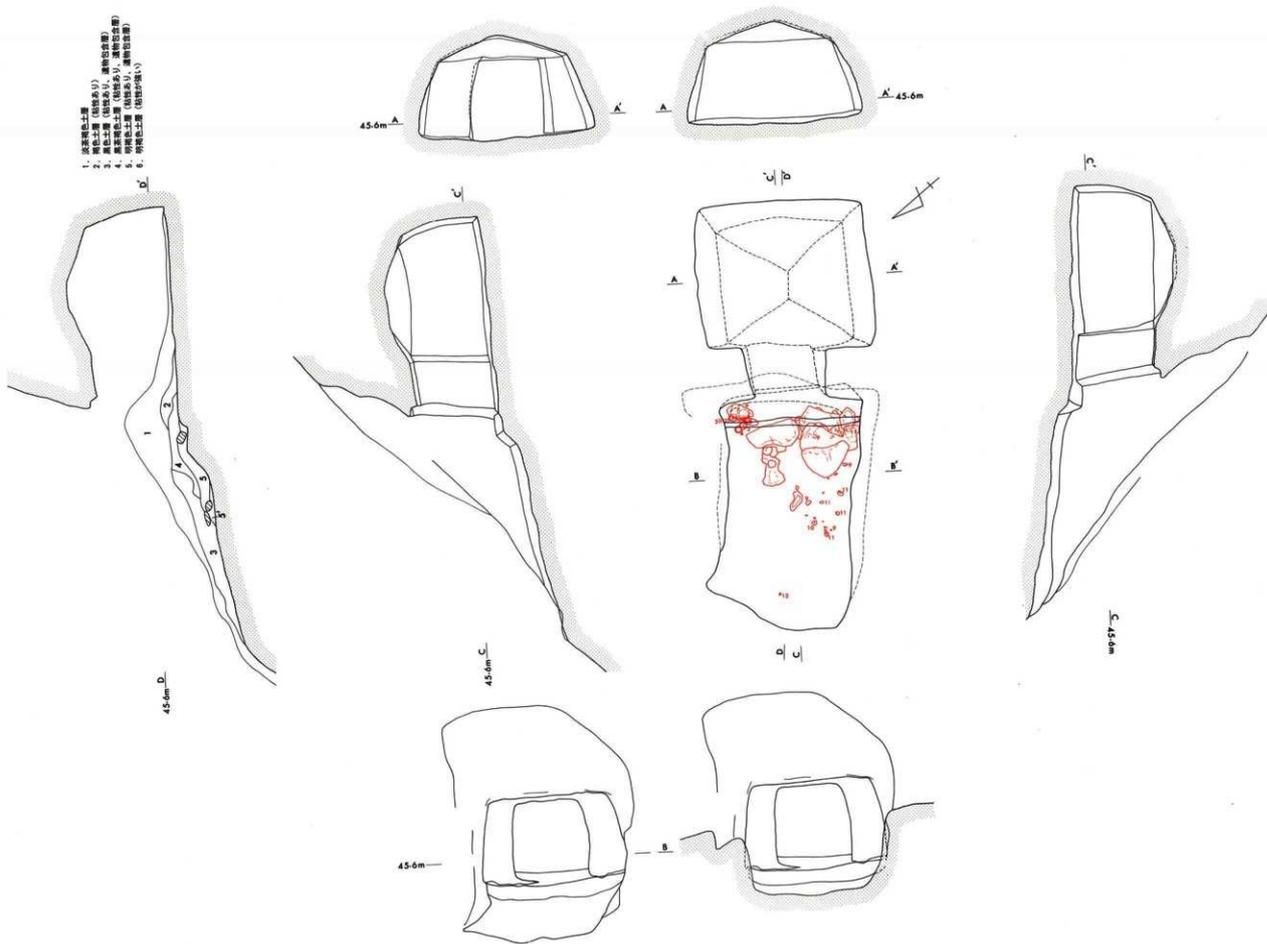
土層堆積状況

調査前から開口しており、羨門の上位から玄室内部が覗き込める状態にあった。堆積土は、玄室にはほとんど認められず、前庭部から羨道部にかけて山形にみられ、羨門部分にもっとも厚く堆積していた。土層は、おおよそ上から①～⑤層の順に堆積しており、うち③～⑤層に須恵器破片を包含していた。また、④・⑤層には閉塞に用いられたとみられる大小の石材(凝灰岩)が混入していた。これらの遺物包含層は、後世の盗掘の際に掻き出された土砂の堆積層と考えられる。ただし、前庭部の左奥隅に限っては、④層の下位に別に黒褐色上の堆積が認められた。ここからは完形品の遺物がまわって出土するなどしており、この部分のみは盗掘の際、攪乱の及ばなかったところとみられ、当時に近い状態を止めていたと考えられる。

玄室の平面は、幅が羨道側で2.1m、奥壁側で2.1m、長さ(奥行き)が中央で1.9m、右壁側で1.9m、左壁側で1.8mを測り、わずかに横長のプランを呈している。床面は、平面をなすが、奥壁側が若干高く造られていて、わずかに傾斜する。各壁面は丁寧に平滑に仕上げられ、左右壁および奥壁はわずかに丸味を帯びながら約15°の角度で内傾する。天井部との界線(軒線)は明瞭で、床面からの垂直の高さは93～100cmを測る。天井部は、棟線を開口方向にむけた、いわゆる妻入り形式で、屋根は各壁面に向かって流れる寄棟(四注)造りの形態をとる。棟線の長さは、37cmである。

羨道は、右袖から60cm、左袖から40cmのところであり、正面向かってやや左手寄りにつく。高さ1.08m、奥行き60cm、幅は前庭部側で93cm、玄室側で107cmを測り、平面は前庭部側が伏まくわずかに台形状を呈している。高さは玄室の側壁の高さに一致している。羨門は、前庭部とは16～20cmの段差がつき、高さ1.1m、幅は下端で1.85m、上端で1.5mを測り、少し下方が広がっている。奥行き30cmほどの床面には、閉塞石を据えるための細かな加工とみられる、わずかな窪みが観察された。また、

1. 淡黄色土層 (结构层)
2. 褐色土層 (结构层)
3. 褐色土層 (结构层)
4. 褐色土層 (结构层)
5. 褐色土層 (结构层)
6. 褐色土層 (结构层)



第59图 1601遺構実測図 (1 : 50)

天井部は、二段に加工されていて、特に丁寧に仕上げられている。前庭部は、長さ2.7mで、幅は玄室側で1.75m、先端で1.8mを測る。先端部は、玄室の主軸からすると左側方向にそれて設けられている。床面は先端部に向かって傾斜しており、最奥端と先端部との差は約45cmある。

羨道先の段差から前庭部にかけて認められた4・5個の閉塞用の石は、本来1枚ないし2枚程度の切り石であったと考えられるが、盗掘の際に壊され、このように倒れ込んだものとみられる。大きさを復元することは不可能であるが、厚さは16cmほどあり、凝灰岩が利用されている。

加工痕跡

羨道部から玄室部にかけての整形仕上げは、一部を除きノミ痕をほとんど無くすほどに、非常に丁寧である。ノミ痕は、天井部の左側と右袖の側壁部分に認められ、2種類のものが確認できた。ひとつは刃先幅4cmほどの平ノミ状工具の痕跡、もうひとつは刃先幅1.8cmほどのノミ痕である。

遺物出土状況

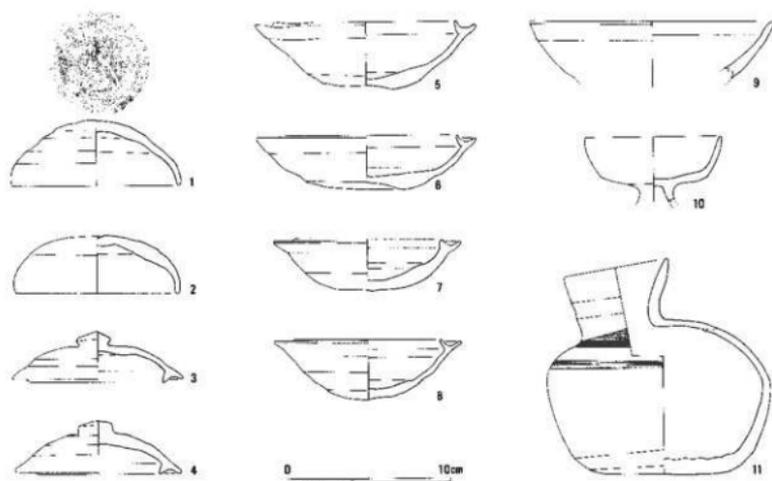
遺物は、すべて前庭部からの出土である。須恵器1～8の8点は、羨門との段差部分である左奥隅の黒褐色土層から一括完形品のかたちで検出した。床面からはわずかに浮いて出土したが、壁際に寄せ集めたような状況がみられた。これらのうち、1・2・5の3点は、2つ1つ5の順に“入れ子”の状態で伏せてあった。葬送儀礼の後、上器を整理した結果を表しているように思われる。また、須恵器9～11は、前庭部のやや右寄りの黒色土中より点在して検出した。これらはいずれも破片の状態であり、盗掘を受けた際、玄室部の上と一緒に掻き出されたものと思われる。

出土遺物（第60図、図版56）

1～4は、いずれも須恵器坏蓋の完形品である。1・2は天井部と口縁部との境がなく丸をもつ小型の坏蓋である。3・4は内面にかえりがつくもので、3は宝珠状の、4は乳頭状のつまみがつく。1の天井部外面には、3本線からなるヘラ記号が記されている。5～8は、いずれも須恵器坏身の完形品である。3点とも短く内傾する立ち上がりをもつが、5・6に比べ、7・8は小型である。9・10は、須恵器高坏の破片で、9は坏部が大きく開くもの、10は小型で、坏部は底部と体部の屈曲度の大きいものである。現状では透かしは認められない。11は須恵器半瓶で、全体の約2/5が欠損する。底部は平底で、胴部は上位に重心があってなだらかな肩がつく。胴部上位にかかるくカキ目が施されている。

2号遺構（1602）（第61図、図版45）

1号穴からは西側に約5m離れ、右斜め上方1mのところにある平坦面を有する掘り込み遺構である。標高は平坦面で46mを測り、北北西方向に掘削されている。凝灰岩の岩盤斜面を削り出したもので、平面は先端幅2m、奥幅0.7～0.9m、奥行き1.9mを測り、不成形ながら先端部がやや広く台形状を呈している。風化のため掘削痕跡を十分に把握することができないが、床面は凹凸面を呈しており、粗い掘削の痕かとみられる。左奥の壁面については一定の幅（約1.3m）で掘削しようとしているにもかかわらず下位では成形が十分ではなく、掘削途中であるという印象を与えるものである。高さは、奥の最も高いところで95cmを測る。



第60図 1601出土遺物実測図（1：3）

性格は特定できないが、水平方向に掘られていること、1号穴の前庭部幅にも近い間口があること、この部分の岩盤を掘削するうえで特に脆いといった傷害が認められないこと、また1号穴と一定の距離を置きながらも出土遺物もなく遺構として完成していないことなどから、掘削途中の横穴墓である可能性があるように思われる。

3号遺構（1603）（第62図、図版45）

2号遺構と同様な平坦面を有する掘り込み遺構である。1号穴の右（西側）斜め下方に位置し、1号穴・2号遺構からはそれぞれ約5m離れて位置する。標高は平坦面で40.5mを測り、1号穴とは4.5m、2号遺構とは5.5mの比高があり、北西方向に掘削されている。凝灰岩の岩盤に水平方向に掘り込んでいる。幅は、先端で1.8m、奥下端で1.1m、同上端で1.5m、床面の奥行き1.5m、奥壁での高さは1.2mを測る。風化のため、加丁痕跡ははっきりしないが、奥壁面の下位から床面にかけて刺突状の小さな穴が数多くみられ、掘削時点の刺突痕跡かとみられる。

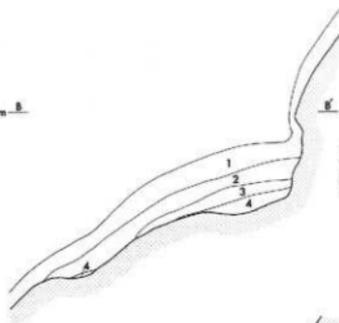
性格ははっきりしないが、一定幅で水平方向に掘削されていること、遺物を伴わず掘削半ばとみられることなど、2号遺構に形状も掘り込み手法にもよく似ており、これも掘削半ばの横穴墓の可能性があるとされる。

遺構に伴わない出土遺物（第63図、図版45）

遺構に伴わない遺物として、表層土の掘削中に須恵器壺破片を取り上げている。特に1号穴（1601）の上方の尾根筋で、比較的多くの壺破片を検出した（第58図参照）。このうち図示したのは、口縁部

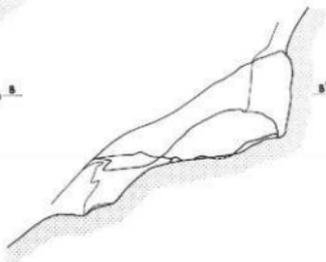


46.5m B

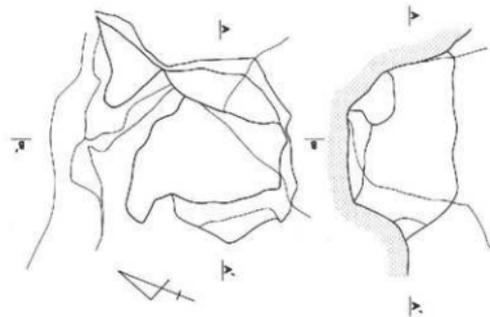
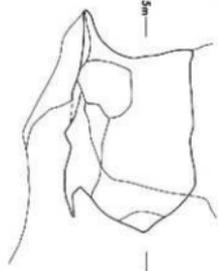


1. 赤層土 (灰棕色土層)
2. 暗褐色土層
3. 淡褐色土層
4. 明茶褐色土層 (黃褐色層を含む)

46.5m B



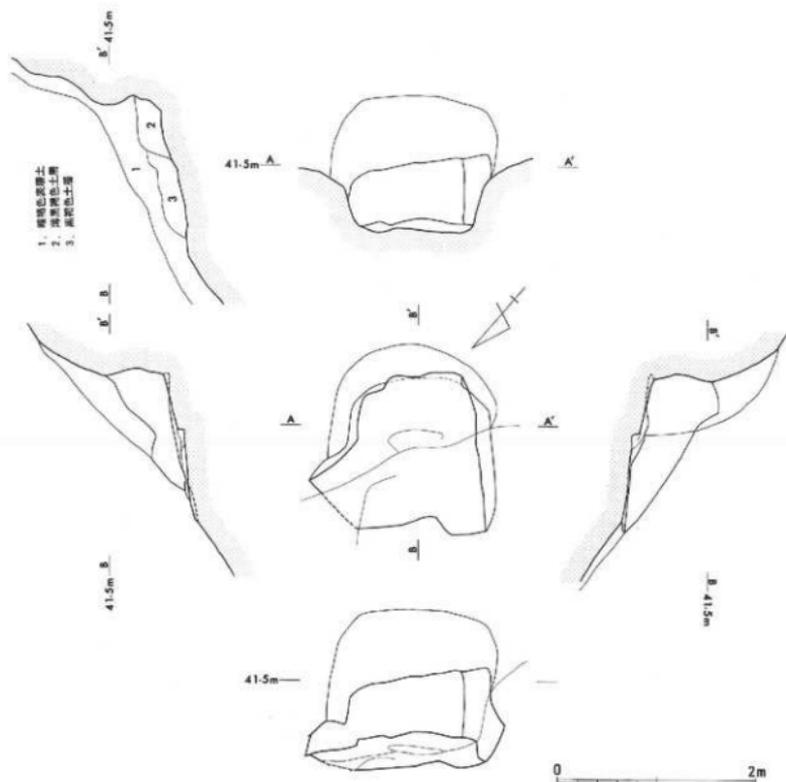
46.5m



46.5m B

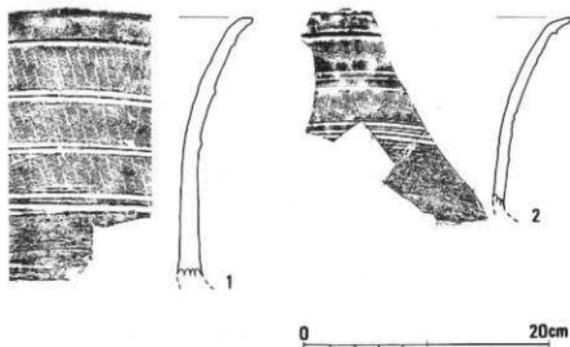


第61图 1602遺構実測図 (1:50)



第62図 1603遺構実測図 (1 : 50)

の破片である。1は、2条の沈線と櫛状工具による波状文が交互に三段にわたって施されている。2は、3条の沈線と櫛状工具による波状文が交互に二段にわたって施されている。前述したとおり、第14支群、第15支群でも同様なケースが認められ



第63図 第16支群遺構外出土遺物実測図 (1 : 4)

ており、丘陵頂部付近で横穴墓の葬送に関して須恵器甕を利用するような何らかの祭祀的行為が営まれた可能性が考えられる。

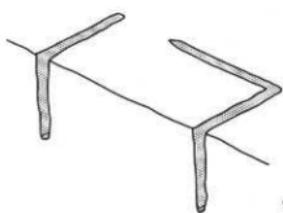
上塩冶横穴墓群第14~16支群外出土遺物観察表

邦図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(φ)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
図28-1	47	1401 玄室内黒色土	坏蓋 (須恵器)	口径12.4 器高4.1	天井部外面：へら切り後ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	外面：青灰色 内面：淡青灰色	全体の約20%欠損
図28-2	47	1401 玄室内	坏蓋 (須恵器)	口径11.0 器高(3.9)	内外面：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡青灰色	全体の約80%欠損
図28-3	47	1401 玄室内	高坏 (須恵器)	底部径7.3	内外面：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	青灰色	胴部のみ残存
図28-4	47	1401 玄室内	坏身 (上須恵器)	口径9.75 器高3.0	口縁部外面：ココナテ 内面：ナデまわし その他：へらみぎ	精緻	良好	赤褐色	内面に放射状の 暗文あり、畿内産
図28-5	47	1401 玄室内黒色土	坏身 (上須恵器)	口径(5.0) 器高(3.6)	底部外面：糸切り？ その他：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	赤褐色	全体の約75%欠損
図28-6	47	1401 玄室内	耳環	長径2.5 短径2.25 幅0.7					内側に鍍金残る、 銅製
図28-7	47	1401 玄室内黒色土	刀子	現存高3.7 刀幅2.7					
図33-1	48	1403 玄室床面直上	坏蓋 (須恵器)	最大径11.5 器高2.9 器高4.0	天井部外面：へらケズリ 口縁部：回転ナデ その他：ナデ	2.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	青灰色	完形 宝珠状つまみ
図33-2	48	1403 玄室床面直上	坏身 (須恵器)	受部径12.2 口径9.9 器高3.75	底部外面：へら切り後ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	淡青灰色	完形
図33-3	48	1403 玄室床面直上	坏身 (須恵器)	受部径12.2 口径9.7 器高3.75	底部外面：へら切り後ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡青灰色	完形
図33-4	48	1403 玄室床面直上	坏身 (須恵器)	口径10.0 器高3.75	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	
図33-5	48	1403 閉器部	篋 (須恵器)	底径1.4 現存高8.2 胴部最大径9.2	底部外面：へらケズリ その他：回転ナデ	2.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	淡黄褐色	胴部のみ現存
図33-6	48	1403 玄室床面直上	小壺 (須恵器)	口径7.1 器高4.1	底部外面：へら切り その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	
図33-7	48	1403 玄室内黒色土	耳環	長径2.2 短径2.1 幅0.5					銅製、鍍金
図33-8	48	1403 玄室内黒色土	耳環	長径2.3 短径2.1 幅0.7					銅製、内側に鍍金 残る
図33-9	48	1403より 下方の表土	耳環	最大長1.25 最大幅0.55 幅0.3					青銅製
図36-1	48	1401 玄室内黒色土	坏身 (須恵器)	受部径12.7 口径10.3	内外面：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡灰色	
図37-1	49	1405 前方黒色土	坏蓋 (須恵器)	口径11.3	内外面：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	青灰色	
図37-2	49	1405 前方黒色土	坏身 (須恵器)	—	内外面：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡色褐色	口縁部の一部のみ 残存
図37-3	49	1405 前方黒色土	坏身 (須恵器)	—	内外面：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡色褐色	口縁部の一部のみ 残存

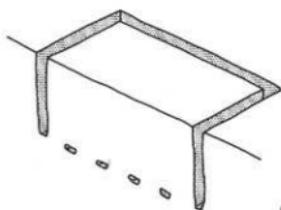
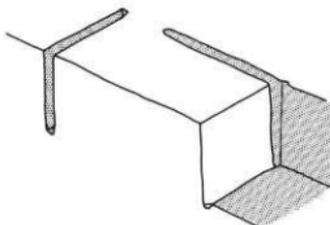
標図番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(μ)	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
図37-4	49	玄室内	高坏 (須惠器)	口径11.3 最大径11.4 器高8.8 口径11.3	底部内面：ナデ その他：回転ナデ 2方角段通し	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	黒灰色	完形、内面に直径 7.2cm内形の重ね 焼きの痕跡あり
図37-5	49	前方暗褐色土	高坏 (須惠器)	—	底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	坏部のみ残存、 外面に浅い沈線 2ヶ所あり
図37-6	49	前方黒色土	高坏 (須惠器)	—	底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡褐色	
図37-7	49	玄室内	壺 (須惠器)	—	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	
図37-8	49	前方暗褐色土	規瓶 (須惠器)	—	内面：回転ナデ、ナデ 外面：回転ナデ、タタキ目	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡黄褐色	
図37-9	49	玄室内黒色土	小玉 (水晶)	径1.3 厚さ1.2					片面穿孔
図37-10	49	玄室内	丸小玉 (水晶)	径1.8 厚さ0.9					片面穿孔
図37-11	49	玄室内	小玉 (ガラス)	径0.85 厚さ0.5					
図37-12	49	前方黒色土	刀子	現存長6.4 刃幅1.2					
図41-1	48	玄室内	坏身 (須惠器)	受部径(9.3) 口径(11.4) 器高(3.7)	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	灰褐色	
図43-1	48	玄室内	坏蓋 (須惠器)	口径12.9 最大径15.2 器高3.7	天井部外面：回転ヘラケズリ 口縁部：回転ナデ その他：ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡黄褐色	輪状つまみ
図43-2	48	玄室内	高台付坏 (須惠器)	口径13.2 器高4.9 底径8.1	底部内面：ナデ その他：ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡青灰色	全体の約10%欠損
図45-1	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径14.1 口径13.9 器高1.6	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	灰白色 一部 青灰色	
図45-2	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径13.8 口径13.5 器高3.9	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	完形
図45-3	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径13.2 口径12.8 器高4.2	天井部外面：ヘラ切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡青灰色	完形、口縁部にか すかな沈線あり
図45-4	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径12.3 口径12.0 器高3.5	天井部外面：ヘラ切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色 約30%淡青灰色	完形
図45-5	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径12.4 口径13.4 器高4.6	天井部外面：ヘラ切り後ナデ？ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	完形
図45-6	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径12.4 口径13.5 器高3.9	天井部外面：ヘラ切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	完形
図45-7	50	玄室内	坏蓋 (須惠器)	最大径12.3 口径12.0 器高4.6	天井部外面：ヘラ切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	完形
図45-8	50	玄室内	坏身 (須惠器)	最大径13.3 口径13.5 器高3.9	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	青灰色	完形
図45-9	50	玄室内	坏身 (須惠器)	最大径13.9 口径11.3 器高4.4	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	

探区番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(μ)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
図45-10	60	1410 玄室内	坏身 (須恵器)	受部径13.7 口径10.7 器高3.4	底部外面：へら切り後ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	完形 底部外面にへら記 号
図45-11	50	1410 玄室内	坏身 (須恵器)	受部径11.8 口径9.3 器高3.5	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	灰青色	完形
図45-12	30	1410 玄室内	平瓶 (須恵器)	口径6.8 器高14.0 胴径径14.9	底部外面：回転ヘラケズリ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	
図45-13	51	1410 玄室内最下層	勾玉 (須恵器)	長さ3.2 幅1.0					片面穿孔
図51-1	53	1501 小横穴	坏蓋 (須恵器)	口径11.0 器高4.25	天井部外面：へら切り 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡黄褐色	完形 内面にへら書き
図51-2	53	1501 小横穴	坏蓋 (須恵器)	口径11.0 器高4.2	天井部外面：へら切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	淡黄褐色 外周5%：黒灰色	完形 内面にへら書き
図51-3	53	1501 小横穴	坏蓋 (須恵器)	口径11.0 器高4.45	天井部外面：へら切り 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	4mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡黄褐色	全体の約10%欠損 内面にへら書き
図51-4	53	1501 小横穴	坏蓋 (須恵器)	口径11.7 器高3.85	天井部外面：へら切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	淡黄褐色	全体の約10%欠損 外面にへら記号
図51-5	53	1501 小横穴	坏蓋 (須恵器)	口径12.2 器高3.9	天井部外面：へら切り後粗い ナデ、天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	淡黄褐色	全体の約30%欠損 外面にへら記号
図51-6	53	1501 玄室	坏蓋 (須恵器)	口径(11.6) 器高(3.7)	天井部外面：へら切り後ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	青灰色	全体の約30%残存 外面にへら記号
図51-7	53	1501 玄室	坏蓋 (須恵器)	口径10.2 器高2.1	天井部外面：へらケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒をわず かに含む	良好	青灰色	全体の約10%欠損 筆跡状のつまみ
図51-8	53	1501 小横穴	坏蓋 (須恵器)	口径13.0 器高2.3	天井部外面：へらケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒をわず かに含む	良好	淡黄褐色	全体の約20%欠損 乳頭状つまみ
図51-9	53	1501 玄室	坏蓋 (須恵器)	口径10.2 器高2.2	天井部外面：へらケズリ 天井部内面：ナデ その他：ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	暗青灰色	全体の約20%欠損 輪状つまみ
図51-10	53	1501 玄室	坏蓋 (須恵器)	口径10.4 器高2.4	天井部外面：へらケズリ 天井部内面：ナデ その他：ナデ	1.5mm以 下の砂粒を わずかに含む	良好	暗青灰色	完形 輪状つまみ
図51-11	53	1501 坑下表探	坏蓋 (須恵器)	口径10.4 器高2.4	天井部外面：へらケズリ 天井部内面：ナデ その他：ナデ	4mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡青灰色	
図51-12	53	1501 小横穴	坏身 (須恵器)	受部径12.0 口径9.6 器高4.0	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を わずかに含む	良好	淡黄褐色	完形
図51-13	53	1501 小横穴	坏身 (須恵器)	受部径11.8 口径9.5 器高3.9	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2.5mm以 下の砂粒を わずかに含む	良好	淡黄褐色	完形
図51-14	53	1501 小横穴	坏身 (須恵器)	受部径12.1 口径9.9 器高4.15	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒をわず かに含む	良好	淡黄褐色	口縁部付近約10% 欠損
図51-15	53	1501 前庭部	坏身 (須恵器)	受部径12.4 口径10.0 器高3.65	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	灰白色	完形 外面にへら記号
図51-16	53	1501 小横穴	坏身 (須恵器)	受部径13.1 口径10.4 器高3.65	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好	淡黄灰色	完形 外面にへら記号
図51-17	53	1501 小横穴	坏身 (須恵器)	受部径12.7 口径10.2 器高3.6	底部外面：へら切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好	淡黄褐色	完形 外面にへら記号

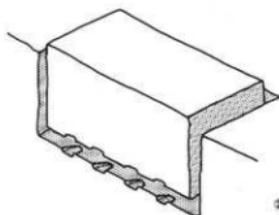
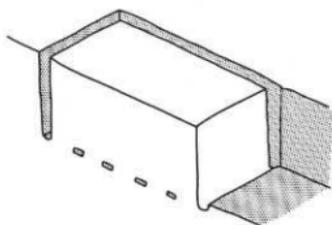
採区番号	写真 図版	土地地点	種 別	法量(m)	手 法 の 特 徴	胎 土 焼 成	色 調	備 考
図51-18	53	1501 小横穴	坏身 (須惠器)	受部径12.9 口径10.25 器高3.85	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	全体の約10%欠損 外面にヘラ記号
図51-19	53	1501 小横穴	坏身 (須惠器)	受部径12.6 口径10.1 器高3.6	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	全体の約20%欠損 外面にヘラ記号
図51-20	54	1501 小横穴	高坏 (須惠器)	口径15.0 器高9.6 底径9.0	底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄灰色	
図51-21	54	1501 小横穴	半瓶 (須惠器)	口径6.0 器高10.9 胴部径10.9	底部外面：ヘラ切り後ナデ、ヘ ラケズリ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 外面：灰白色、 暗灰色 内面：灰褐色	口縁部 部分欠 底部外面にヘラ 記号
図51-22	54	1501 小横穴	平瓶 (須惠器)	口径7.1 器高10.9 底径10.9	底部外面：回転ヘラケズリ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	
図57-1	55	1504 玄室内最下層	坏蓋 (須惠器)	口径12.0 器高4.0	天井部外面：ヘラ切り 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡青灰色	
図57-2	55	1504 玄室内	坏蓋 (須惠器)	口径10.2 器高3.3	天井部外面：ヘラ切り 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好 淡青灰色	
図57-3	55	1504 玄室内最下層	坏身 (須惠器)	受部径12.4 口径9.8 器高3.6	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好 淡青灰色	完形
図57-4	55	1504 玄室内最上層	坏身 (須惠器)	受部径10.8 口径8.5 器高3.15	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 青灰色 外面50%；淡青 灰色	完形 外面にヘラ記号
図57-5	55	1504 玄室内最下層	壺 (須惠器)	最大径14.6 現存高10.8	底部外面：回転ヘラケズリ 体部外面：カキ目 その他：回転ナデ	1.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好 淡青灰色	底部外面にヘラ 記号
図60-1	56	1601 前庭部左隅	坏蓋 (須惠器)	口径10.1 器高4.0	天井部外面：ヘラ切り後ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	完形 外面にヘラ記号
図60-2	56	1601 前庭部左隅	坏蓋 (須惠器)	口径9.9 器高3.5	天井部外面：ヘラ切り 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	完形
図60-3	56	1601 前庭部左隅	坏蓋 (須惠器)	口径10.5 器高3.05	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好 淡黄褐色	完形 宝珠状つまみ
図60-4	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	坏蓋 (須惠器)	口径10.2 器高3.25	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	3.5mm以 下の砂粒を 若干含む	良好 淡黄褐色	完形 環宝珠状つまみ
図60-5	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	坏身 (須惠器)	受部径11.0 口径13.5 器高4.1	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	5mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	完形
図60-6	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	坏身 (須惠器)	受部径14.45 口径10.8 器高3.3	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 外面：灰褐色 内面：青灰色	完形
図60-7	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	坏身 (須惠器)	受部径11.5 口径8.9 器高3.15	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 淡黄褐色	完形
図60-8	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	坏身 (須惠器)	受部径11.5 口径8.0 器高3.7	底部外面：ヘラ切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 灰褐色	完形
図60-9	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	高坏 (須惠器)	口径(14.8)	底部外面：ヘラ切り その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 青灰色	坏部片
図60-10	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	高坏 (須惠器)	口径(8.2) 残高(4.1)	坏部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 暗青灰色	坏部約30%、胸部 約90%欠損
図60-11	56	1601 前庭部左隅 黒褐色土層	半瓶 (須惠器)	口径(6.2) 器高(13.1)	底部外面：ヘラケズリ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を若干 含む	良好 青灰色	全体の約40%欠損



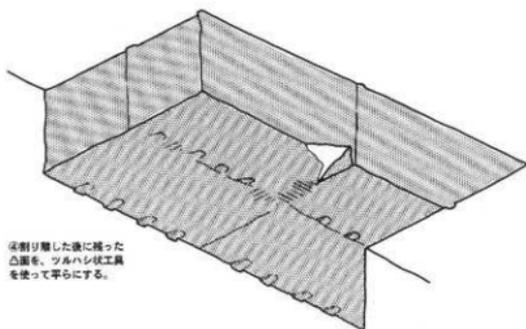
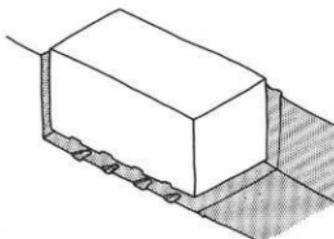
①ツルハシ状工具で両面に溝を切る。



②(矢穴を鑿る)

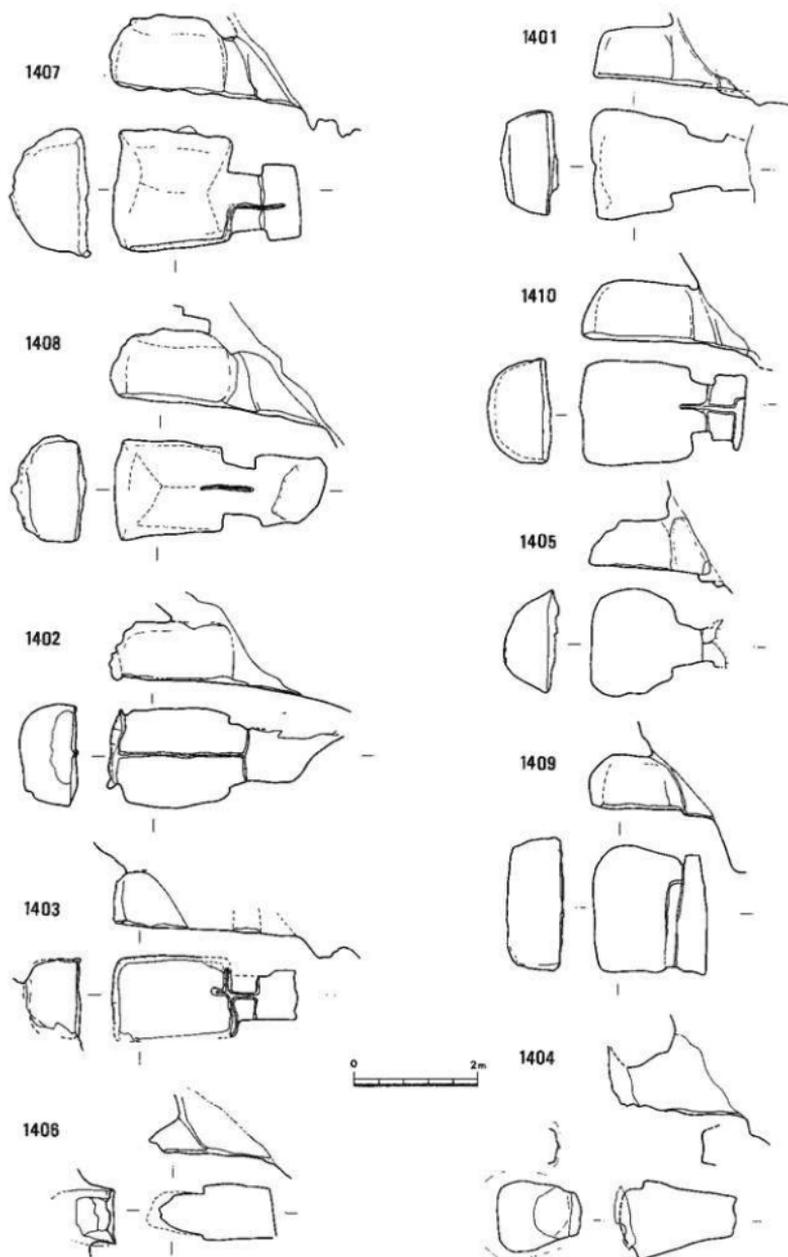


③矢を入れて底面を削り離す。
(金棒などを使って移動させる)

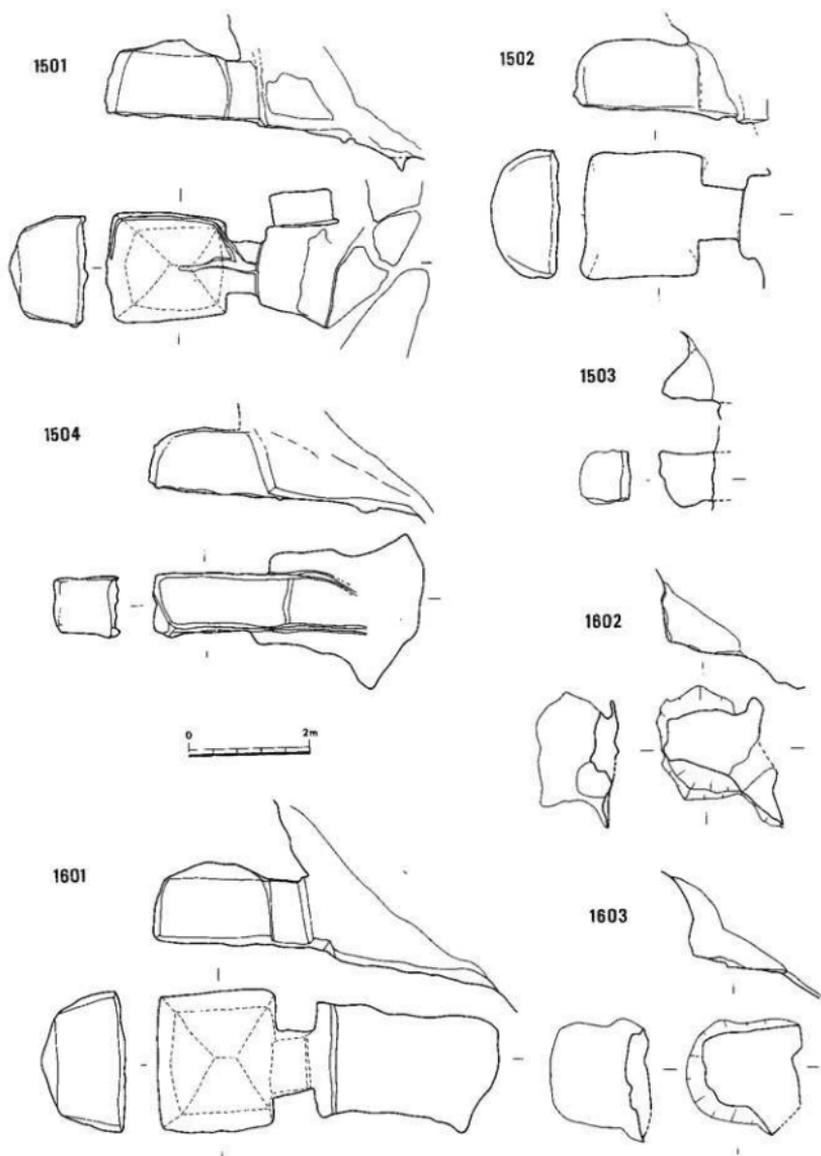


④削り離した後に残った
△底面を、ツルハシ状工具
を使って平らにする。

第64図 大井谷石切場跡石切り工程復元模式図



第65圖 上塩冶横穴墓群第14支群全遺構圖(1:80)



第66圖 上塩冶横穴墓群第15・16支群全遺構圖（1：80）

Ⅶ 終 と め

これまで大井谷石切場跡と上塩冶横穴墓群第14～16支群の両遺跡の発掘調査について報告してきたが、ここではこの二種類の遺跡の特徴をまとめるとともに、これに伴う幾つかの問題について触れて終わりにしたいと思う。

1 大井谷石切場跡について

本遺跡は、出雲市南部の低丘陵地、上塩冶町大井谷（白石谷）に所在する凝灰岩（一部砂岩を含む）の石切場跡である。凝灰岩の岩盤層が存在する丘陵斜面にある大小4カ所の石切り跡を発掘調査した。規模は、Ⅰ地点が35m×8.8m、Ⅱ地点が20m×18m、Ⅲ地点が3m×2.5m、Ⅳ地点が1.7m×1.3mほどである。いずれも露大掘りされ、岩盤にはツルハシ状工具とヤ（クサビ）を用いて切り出した痕跡を明瞭に止めていた。この痕跡をもとに切り出しの作業工程を復元してみると、およそ次のようになる（第64図）。

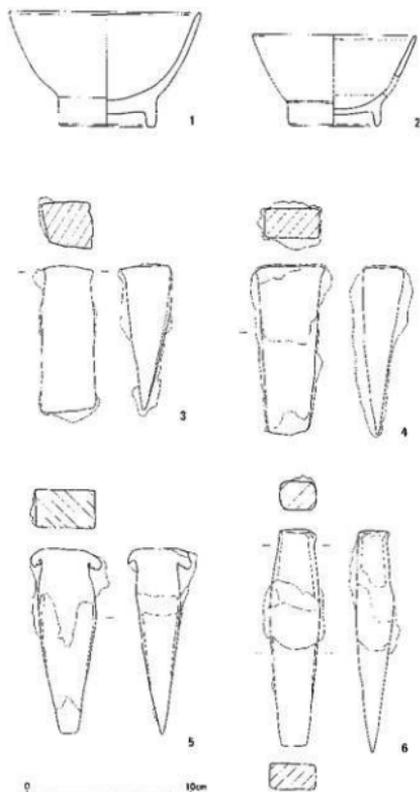
① まず、岩盤にツルハシ状工具を用いて必要な大きさに応じて周囲に溝を掘る。

② 溝を切り終えると、今度は底面にヤ（クサビ）を打ち込み、割り離す。

③ 場合によっては、切り取った後うまく割れなかった場合の残存部分の除去や、次の作業をしやすいするために、ツルハシ状工具を用いて床面を平滑にする。

（なお、これらの工程を進めるうえで、①の前段で表面に表土がある場合は、当然これを取り除いてから作業が始まったものと考えられ、また、②の段階ではいきなりヤ（クサビ）打ち込むのではなく、前もってツルハシ状工具を使って穴を空けたものと想像される。さらには、割り離して動かすときには金棒のようなものが使用されたであろう。）

以上のように工程が復元されようが、この石切りの特徴は、最初にツルハシ状工具で溝を掘り、その後ヤ（クサビ）を用いて割り離すという点にあり、この手法は“溝切り技法”と呼んでよいものであろう。



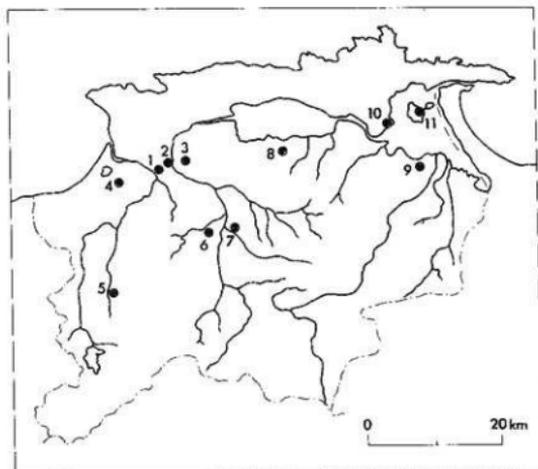
第67図 大井谷石切場跡出土遺物実測図（1：3）

ところで、近世・近代の石切り技法については、大阪・和泉（阪南）砂岩、兵庫・御影石（花崗岩）、香川・庵治石（花崗岩）などの例のように、ヤ（クサビ）を打ち込んで割り裂いていく硬石系石切り技法と、香川・豊島石（凝灰岩）、福井・笏谷石（凝灰岩）、大分・国東石（凝灰岩）などのように、ツルハシを用いて周囲に溝を切り、その後ヤ（クサビ）を使って割り離す軟石系石切り技法と、大きく二つの技法が知られている。^(注1) 島根県下でもこの二つのタイプの石切り技法が認められ、前者であれば、松江・大海崎石（安山岩）、掛合・三刀屋・木次の花崗岩などを例に挙げることができる。また、後者であれば、穴道・来待石（凝灰質砂岩、ここではキリヌキ技法と呼んでいる）をはじめ、安来・荒島石（凝灰岩）、斐川・出西石（凝灰岩）、出雲・保志石石（凝灰岩）などがこれに該当するが、今回調査した大井谷石切場跡の場合もこの系統に属するものとしてよからう。なお付言すれば、このタイプの手法を用いた石切場の分布は、出雲部では中海・穴道湖の両汽水湖の南側に位置する湖南山地に沿って点々とみられ、この地帯の地質学的な組成と関連した興味深い在り方を示している。

次に、これにより切り出された石材の寸法とその利用方法についてである。

厚さの点ではっきりしないが、その痕跡からは、およそ、立方形で①一辺4・50～60cm角のもの、②一辺70～90cm角のもの、③一辺100cmないしはこれを越えるものや、長方形で④一辺40cm前後×一辺80～90cm前後のもの、⑤一辺50～60cm×一辺100～120cmのものが多くみられ、まれに⑥径80～100cmの円形のものも認められた。これらの違いは用途に応じた規格の差とみてよいであろう。利用面については、実際どのように利用したかは今回半製品や未製品の上山がなく、はっきりとしたことは分からないが、石材の寸法や特性、聞き取り調査の結果からすると、石垣や建物の基礎石、そして、特に耐火性・保温性に優れているという点を活かして、コタツの火櫃、あるいはクド材としても利用されたものと推定される。また、1m角のやや大型のものは肥溜めの枠などが想起され、円形のものにはFや井戸の井筒の可能性が考えられる。

次に、本石切場跡の存続年代であるが、I・II地点ともに遺構に伴って19世紀前半の陶磁器が出土していることから（第67図1・2）、少なくとも江戸時代後期には開始されていたものとみてよからう。終わりについては、出土遺物のヤ（クサビ）の中には全体のプロポジション上二つのタイプがあることや（同3・4



第68図 出雲地方における近世・近代の主な石切場跡分布図

(1; 出雲・大井谷, 2; 出雲・栗原, 3; 斐川・出西, 4; 出雲・保志石, 5; 掛合・波多, 6; 三刀屋・栗谷, 7; 木次・木次, 8; 穴道・来待, 9; 安来・荒島, 10; 松江・大海崎, 11; 八束・大根島・江島)

と5・6の違い)、基部に面取りのあるものが認められることから(同6)、これを時期差と捉えれば、19世紀を通して、あるいはさらに下って20世紀初めにも及んでいた可能性があるようにも思われる。したがってここではやや幅をもたせて、一応江戸時代後期から近代の初めにかけて石切場跡としておきたい。この点は、既に述べたように、この地で三代にわたって石工業を営んできた加田氏の聞き取り調査の結果とも大きく矛盾するものではないと考えられる。また、現段階での石切場跡についての文献資料は見当たらないが、管見では明治18年(1885)の『上塩冶村誌』の民業の条に「(前略)石工業トスルモノ窓戸(後略)」と記載されているのが参考になろう。ここにみえる石工が本石切場跡と直接関係するかどうかは定かではないが、少なくとも19世紀後葉の段階で同地において石工を生業にしていた職人がいたことは間違いなく、石材を同地に求めていた可能性が想定もできる。(註2)

大井谷石切場跡では、切り出した石は大きくても100~120cm大のものと推定された。このことは、この地の凝灰岩の性質、すなわち、摂理がわりと細かく走っているところに大きく制約されたものとみられ、現在でも継続して石切りが行われて多くの生産量と規模を誇る米待石に比べると、より大きな石材を切り取るにはもともと適さなかったものと考えられる。また、耐火性・保温性に優れているとはいえ、風化しやすく脆いことや石灯笼などの細工品には向かなかったとみられること、また、近代に至って各用材が石材からセメント材などに取って替わられるといった変化などが要因して、大井谷での石切りは、そう長くは続かず途絶えてしまったものと推測される。

ともあれ、県下ではこれまで石切場跡の発掘調査例は数少なく、今回貴重な資料を得ることができたものと思われる。特に、遺構に伴って数点の陶磁器やヤ(クサビ)が出土したことは、この種の石切場跡の時期を知るうえで有効であった。また、I地点では陶磁器碗とともにスス付着面や割り込みのある水盤風の石材が出土し、鍛冶的な作業や休憩のためのスペースがあったことを垣間見せる一角も認められ、石切場の作業風景を窺い知るうえでも貴重な資料になったものと思われる。そして、今日ではその利用価値を見出せず、地域の人々の記憶からも消えうせてしまった観のある一産業遺跡の存在を知るとともに、かつてそれを利用して成立していたと考えられるこの地域の石の生活文化史を掘り起こすきっかけにもなろうかという点で意義があったように思われる。

2 上塩冶横穴墓群第14~16支群について

上塩冶横穴墓群は、鳥根県下では最大規模を誇る横穴墓群であり、現在までに全部で37支群200穴近くが確認されている。そのような中において、まずは今回調査した第14~16支群の全般的な在り方についてまとめてみると、およそ次のようになろう。

① 第14支群は(近世の石切場により一部消滅した可能性もあるが)、第13支群と向き合う丘陵斜面の凝灰岩(一部凝灰質砂岩)に穿たれた、ほぼ西方向に開口する横穴墓8と小横穴状遺構2の計10の遺構からなる。存在形態は、寄棟(四注)式家形妻入り形式、縦長プラン丸天井型、不整形型などがあって一様ではなく、また、比較的小型のものが多い。1402から1410までは比高差14m、水平距離にして66mあり、さらに小さな単位—01~04・05~07・08~10—にグループ分けができそうである。

盗掘を受けていたが、出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品、耳環、玉類があった。

② 第15支群は、第16支群と向き合う丘陵斜面の凝灰岩（一部凝灰質砂岩）に穿たれた、ほぼ東方、向に開口する横穴墓3と小穴遺構1の計4つの遺構から構成されている。寄棟（四注）式家形妻入り形式や箱型などがあり、規模も決して大きくはない。丘陵先端部にある1501～03と、約30mの距離をおいて谷奥に単独で存在する04と、2つの小グループに分けられる。このうち、01は比較的整美な造りであるとともに、前庭部右壁面に小横穴を伴う特異な構造をもつ。いずれも盗掘され、出土遺物は須恵器や鉄製品程度であるが、01の小横穴からはヘラ書き文字を刻んだ坏蓋を含む須恵器類の一括遺物を検出した。

③ 第16支群は、第15支群と向き合う丘陵斜面の凝灰岩に穿たれた、ほぼ西方向に開口する横穴墓1と掘り込み状遺構2からなっている。1601は、寄棟（四柱）式家形妻入り形式で、比較的整美な造りである。盗掘されていたが、須恵器類が出土している。2つの掘り込み状遺構は、横穴墓の掘削途中の段階のものとも考えられる。

以上が第14～16支群の概要であるが、こうしてみると、既に調査された第20・21支群などとはかなり様相を異にしているといえよう。すなわち、妻入り・平入りの違いがあるとはいえ、寄棟（四注）式家形のみ5穴で構成された第20支群、妻入りの寄棟（四注）式家形のものばかり10穴からなる第21支群、あるいは寄棟（四注）式妻入り形式を中心にして20穴ほどから構成される第22支群などに比較して、第14～16支群の場合は、群を構成する数が少なく、また平面・天井などの構造形式もばらつき、その規模も小さいといった特色が指摘できよう。また、出土遺物においても、大半盗掘を受けているとはいえ、金糸・金環・金銅装大刀などの稀少品を副葬する横穴墓を含む第21・22支群にくらべ、第14～16支群は総じて須恵器類を主体にした通常の副葬品しかなく、その格差は歴然としているといえてよい。今回の調査は、上塩冶横穴墓群が整正家形の横穴墓に代表されるとはいえ、けっして画一的な存在形態ではなく、むしろ極めて多様な在り方をしていることを示したものとして第一にその意義があったと思われる。また、それぞれの特色を備えたグループが丘陵斜面を分け合っているように分布することから、各丘陵斜面毎にグルーピングされた今日のような支群の呼称に一定の妥当性があることを示したことにもなったものと思われる。問題は、この支群毎の特色こそが各々の集団の個性—それぞれが歴史的におかれていた立場と地位—の表出にほかならないと考えられるが、それが具体的に何かは今後の調査の進展ともあわせて十分に検討されなければならない課題であろう。

やや抽象的な記述になったが、次に第14～16支群の時期について、出土遺物のうちの須恵器坏類から検討してみたい。

坏類を通見すると、形態的特徴・調整手法・法量などからおよそ次のように分類ができる。

(A類) 坏蓋で全体としては丸みをもつが、天井部と体部とにまだ境があり、端部内面にもかすかな段表現がみられ、天井部外面に軽いタッチで回転ヘラケズリが施されている。口径は13.9cm。ただし、これとセット関係になるような坏身は出上していない。

(B類) 天井部と体部との境がなくなり、端部内面の段も消え、回転ヘラケズリも認められない坏蓋である。口径は13.4cm。坏身は、低い立ち上がりが付き、蓋同様回転ヘラ削りも伴わない。口径は11.

5cm。

(C類) 坏蓋・身は、B類と同様な形状・調整であるが、丸みが一段と強くなりやや小型のものになる。蓋の口径は12.2cm前後、身の口径は10.2cm前後。

(D類) B・C類と同種の坏蓋と坏身であるが、最も小型化したものである。蓋の口径11.0cm前後、身の口径9.5cm前後。

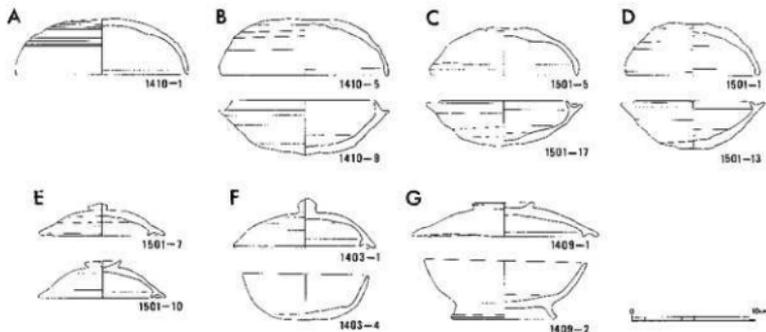
(E類) 宝珠形または輪状のつまみを有し、内面に返りが付く坏蓋で、口径8.0cm前後で、最も小型のものである。ただし、これに伴うものとみられる坏身は出土していない。

(F類) 宝珠形つまみが付く坏蓋で、E類よりもやや大きく、器高もやや高い。口径は9.0cm。坏身は、受部がなく体部が丸みを帯びて終わるだけのもの。口径は10.0cm。

(G類) 坏蓋は、輪状つまみが付き、内面に返りを有するもので、口径は12.9cm。坏身は、外傾する体部にハの字状の高台が付くもので、口径は13.4cm。

これは必ずしも編年的な流れを意味しないが、いわゆる坏Hと呼ばれるA類からD類までのものは、A類が最も古い様相を示し、B類、C類、D類は小型化への変化を表すものと考えられる。また、いわゆる坏Gまたは坏Bと呼ばれるE類、F類、G類は、G類が最も新しい段階のものであり、これに先立ってE類とF類が存在するが、この両者はD類以降出現するのではと考えられる。既に明らかにされているように、上塩冶横穴墓群全体の出土須恵器のなかには、蓋の天井部や身の底部外面に明瞭な回転ヘラ削りを施したA類に先行するタイプのものや、あるいはE～G類と同じつまみを有しながら内面の返りも消失し、端部を折り返しただけのタイプのもが知られているが、本横穴墓群中では該当するものがない。これらの須恵器は、山本編年ではA類以外はすべてVI期の特徴を備えている。A類についてはⅢ期の要素を残しながら新しい様相を呈して、Ⅲ期末ないしはⅣ期初頭の時期が与えられよう。陶邑編年では、A類がTK209新の特徴を備えていると考えられる以外は、おおむねTK217に併行するものと考えられる。(98)

実年代については、飛鳥編年や陶邑編年などを参考にすれば、A類がおよそ6世紀末から7世紀初頭ごろ、B・C類がおよそ7世紀前半ごろ、D類が7世紀半ばごろ（E・F類を含むか）、G類が7



第69図 上塩冶横穴墓群第14・15・16支群出土示準須恵器図(1:4)

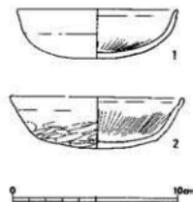
世紀後半ごろではないかと推定される。これでいけば、第14～16支群の横穴墓は6世紀末ないしは7世紀初頭にはじまり、ほぼ7世紀代を通じて存続した横穴墓群であったものと考えられる。量的にはC・D・E類が多く認められ、この時期葬送が最も盛んであったものと推定される。また、これらのなかで、A類とB類が出土した1410号穴は、上塩冶横穴墓群中、いまのところ凝灰岩の岩盤に穿った横穴墓としては最も古い段階の横穴墓ではないかとみられる。もし、これに誤りがなければ、岩盤に穿たれた最初の横穴墓は、整正家形妻入り形式のものではなく、断面カマボコ状の横穴墓であった可能性もでてよう。

次に、個別の問題として、出土遺物中の、二つの遺物について注目してみたいと思う。

第一は、畿内産または畿内系土師器についてである。畿内産土師器とは、飛鳥・奈良時代に畿内で作られた特徴的な土師器で、畿内から全国各地域に搬入されたものがこう呼称されており、また、これを模倣した土師器の出土がこのところ知られるようになった。畿内産土師器は、この時期の各地域と畿内政権とのかわりを示す指標の一つとされ注目されているが、今回の調査でも、1401号穴から7世紀半ばごろの畿内産土師器が出土している。この種の土器は、県下では安来・高広遺跡横穴墓群、同向山横穴墓、松江・出雲国庁跡、出雲・神門寺境内廃寺遺跡、八雲・折原上堤東遺跡（十坑墓）、鳥根・宮尾横穴墓群、佐田・尾崎横穴墓群、頓原・森遺跡、仁摩・楡ノ木谷横穴墓群、江津・空山古墳群、旭・小才古墳群、瑞穂・江迫横穴墓群、西郷・飯ノ山横穴墓群、知夫・高津久横穴墓群、海士・御波横穴墓群、西ノ島・物井横穴墓群などが知られており、各地に相当数及んでいることが知られる。上塩冶横穴墓群では、今回報告のもの以外に、第6支群1号穴（第70図2）や第22・35支群、小片ではあるが第20支群付近および第21支群1号穴からも出土しており、すべてではないにしても、支群ごとへの副葬が看過できないものとなっている。これらの出土例をみると、既に指摘されているように、古墳・横穴墓からの出土がほとんどであり、時期的にも7世紀半ばごろを中心にしており、この時期の墳墓群もっている属性の一つとみてもよからう。畿内から搬入された土器が、墳墓へ副葬されている事実は、墳墓群を営む集団が畿内政権と無関係には存在しえなかったことを示すものといえ、畿内政権の地域支配の確立からんで、今後もこの種の土師器の出土状況が注目されることである。(94)

第二は、ヘラ書き文字資料についてである。本横穴墓群の出土遺物の中で、今回最も注目される遺物は、1501号穴より出土した3点のヘラ書き土器である。この3点には、記号風ながら同じ書順でほぼ同じ字形が刻まれていたが、既に述べたように、いずれも「各」の字が表わされていると考えられる。では、この「各」は何を意味しているのかが問題となる。

土器の特徴は、いずれもほぼ同一の形状・調整手法・法量を備えており（同じ須恵器窯で製作されたと考えられる）、時期は7世紀半ばごろのものと思われる。この時期のヘラ書き土器は、人名を表している場合が多いとされており、わずか一字の難しさはあるものの、本ヘラ書き土器の文字も同様の可能性が考えられよう。これを想定してある人名を導きだしたとすると、いわゆる古代の氏族名の



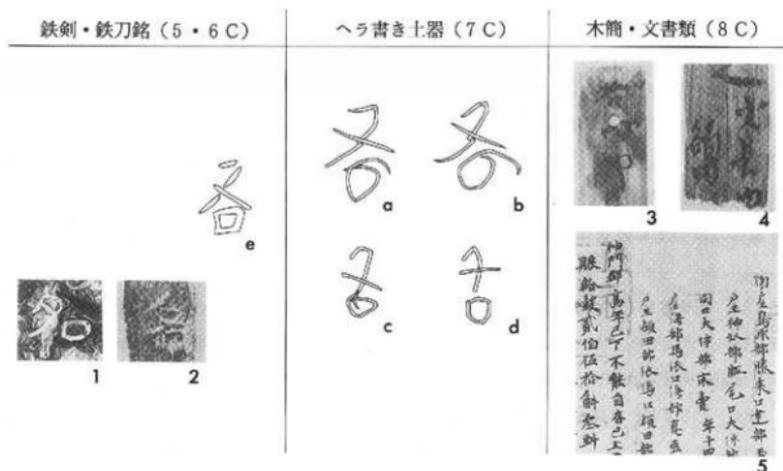
第70図 上塩冶横穴墓群第6・14支群出土陪文土器実測図（1：3、1：14支群、2：6支群）

一つである額田部があり、その可能性は高いものと考えられる。言い換えれば、この場合の「各」は、額田部を表すところの「額」を意味し、その異体字表現である「各」一字でもって表記した可能性が高いとみられるのである。

古代の史料にあっては、額田部の「額」は扁のウ冠が省略されて「額」と表記されたり、さらに旁も省略されて単に「各」とのみ表されるケースが認められる。前者であれば、例えば平城宮跡出土木簡(4)や、天平6年(739)の「出雲国計会帳」(正倉院文書)、天平11年(739)の「出雲国大税販給歴名帳」(同・5)があり、後者であれば、これも平城京跡出土木簡(3)に例がある。木簡・文書以外では、前述のとおり、本例を「各」と判読する上で参考にした松江市・岡田山1号墳出土の鉄刀銘(e)を例に挙げることができる。

「各」が額田部の額を表しているのではないかとの妥当性を考えるとき、ふたたび、岡田山1号墳出土の鉄刀銘との比較においてヘラ書き文字に注目してみよう。なぜなら、この文字の場合は、直接とは言わないまでも、岡田山1号墳出土鉄刀銘にみられるような金石文の文字が本ヘラ書き文字の成立に多分に影響していると考えられるからである。

ヘラ書き土器のうち、aとbをよく見ると、第1線の左下に払う線が、後で第2線と交わる直下のところで、一旦鉤の手状に折れ曲がっていることが明らかである。このヘラの動きは、偶然の所産とはいえ、意図的なヘラの運びと考えて誤りなからう。問題は、なぜこのようにわざわざ一旦屈曲させなければならなかったかということである。一方、岡田山1号墳例では、「各」の字の第1線の払いの部分は、第2線の払いによって2つの線に分断されていることが分かる。これは、鉄地に象眼し



第71図 1501出土ヘラ書き文字「各」と参考資料図

a～c：1501号穴出土、d：陰田12号穴出土、e：岡田山1号墳出土鉄刀銘「各」(額)、1：埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘「各」、2：江田船山古墳出土鉄刀銘「各」、3：平城京S D4570溝出土186号木簡「各」(額)、4：平城京S K3178欄出土2723号木簡「額」(額)、5：「出雲国大税販給歴名帳」(正倉院宝物、「額」(額))

た際、タガネを入れる順序がそうさせたのであり、第2線を入れることによって第1線を途中で分けた格好になっているのである。これと同じような例に、熊本県・江田船山古墳山上の鉄刀銘中の、通説で「名」と判読されている文字②があり、この場合も第2線の左下に払われる線が、第3線によって分断されていることが明らかである。岡田山の場合、なお注目すべきはこの分断によって上下の払いの線が一直線上に繋がらず微妙にズレており、まさにこうした点がへら書き上器 a・b にみられる第2線の屈曲と一致するものといえるのではないだろうか。言い換えれば、a・b の特徴のあるへら運びは、ある意味で金石文のクセを忠実に真似た結果に外ならないのではないかと考えられる。このことは、既に述べた a～d に共通した「冂」の表現や、b～d にみられた第1線を左下から山形に持ち上げるようなところなどが、金石文にしばしば使われた丸文字風表現と省画化の特徴をとらえたものとみられる点とも相通じるものがあるように思われる。以上のようなことから、本資料の「各」は、岡田山銘の「各(頼)」に類似したものをモデルにした可能性がたつよく、したがってこれが額田部を表しているとする蓋然性をより高めるものといえるのではなかろうか。

本資料をはじめ、この時期のへら書き文字は、直線と曲線との併用による文字構成、丸文字表現、省画化表現に特徴づけられるものが多いように思われる。そしてまた、このような文字の場合は、前述した「各(額)」の例のように、金石文との類似性がたつよく、その模倣・簡略化から形成された可能性が強いのではないかと推定される。5・6世紀代の日本の金石文は、丸文字表現などが大陸の金石文の影響を受けて成立・伝播していることが指摘されているが、これと同じような具合に、7世紀代においてもなお(少なくともこの山陰地方にあっては)金石文の模倣などを通じて文字が伝播していた可能性が指摘できるように思われる。本へら書き文字群は、7世紀代における文字の伝播の在り方や普及度を知るうえでも貴重な資料が得られたものといえよう。(註5.1)

さて、最後にもう一度、このへら書き上器が人名、すなわち「額田部」を表したものとすると、その山上がどのような意味をもつのかを検討して終わりにしたい。

文献史料や金石文から額田部氏をみると、天平5年(733)勅造の「山雲国風土記」では、大原郡の少領として「額田部臣」の名がみえるのをはじめ、天平11年(739)の「出雲国大税賑給歴名帳」には出雲郡の杵築郷と漆治郷に、また天平6年(734)の「出雲国計名帳」では大原郡屋裏郷と秋鹿郡にその名が見えている。また、再三引用する岡田山1号墳山上の鉄刀銘にもその名が記されていて、出雲国内に点々と存在したらしいことが確認できる。もし、本例が「額田部」を表したものであるとすれば、かつての神門部の領域では初の文字資料出土ということになる。その場合、問題は、文字と横穴墓がどのような関係にあったかという点である。筆者については、少なくとも焼成前に刻まれていることから、須恵器の製作工人であるとみて間違いなかろう。それではその工人が額田部を称して自らの氏名を明らかにする意味で刻んだのであろうか。横穴墓の被葬者およびその関係者と、副葬すべき須恵器の供給者との間に何らかの関係、例えば、へら書きをあらかじめ刻する関係にあったとは考えられないだろうか。もしそうであれば、この横穴墓にこそ関係した氏名ではなかったか。へら書き上器は一般に焼成前に書かれたものであり、第一義的に考えると上器の製作および製作者にかかわるものとみるのが普通であろう。では、なぜ3つの上器に同じ文字を刻まなければなら

かったのか、また、なぜここに集中しなければならなかったのか。

1501号穴は、小横穴を有する点や、へう記号入り土器が集中するなど、これまで知られている上塩冶横穴墓群の中にあっては特異な横穴墓でもある。そうしたことがらを総合的にとらまえるならば、文字に表された額田部がこの横穴墓の被葬者と何らかの関係があったとみるのも一考に値するものと思われる。類似資料の増加をまちながら、この資料について今後も検討を加えていきたいものと思う。

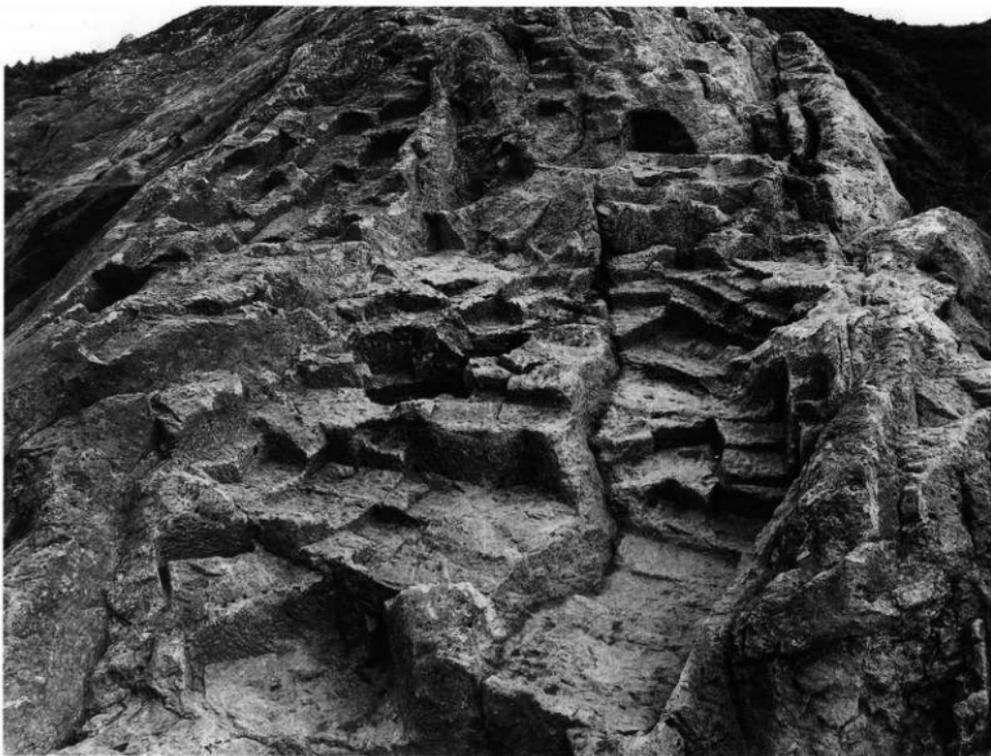
註

- (1) 大井谷石切場跡の検討では、(1)『国東半島の石工1—大分県宇佐風十記の丘歴史民俗資料報告書第1集』(同資料館 1983)、(2)『来待石の採石と加工—出雲石造文化の源流をたずねて—(穴道町ふるさと文庫3)』(穴道町教育委員会、1990)、(3)『石をめぐる歴史と文化—笏谷石とその周辺—(福井県立博物館11回特別展・開館5周年記念)』(福井県立博物館、1989)、(4)段上達雄ほか『中国四国地方の民具』などを参考にさせていただいた。
- (2) 島根県立図書館蔵の資料、および川上稔氏の教示による。なお、参考までに出雲市関係で江戸時代から明治期にかけての石工に関する資料を挙げると、明治18年の村誌関係では、今市村に「石工ヲ業トスルモノ三戸」、所原村に「工ヲ業トスルモノ三拾戸」といった記事がみえる。また、江戸時代の宝暦4年(1754)の『神門郡北方萬指出帳』によれば神門郡北方に「石切六軒」、「石積舟四艘」とあり、このうち前者はすべて所原村にあり、また後者のうち一艘は下塩冶村にあったことが記されている。
- (3) 須恵器編年に関しては、山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収、1971)、田辺昭三『陶邑古窯跡群I』1966、『都城の土器集成』(古代の上器研究会編、1992)などを参考にさせていただいた。
- (4) 畿内産(系を含む)土師器およびその出土地については、林部均氏の「律令国家と畿内産土師器」(『考古学雑誌』77-4、1992)外の一連の論文を参考にした。また、この論文に載っていない出土地については、筆者が各遺跡発掘調査報告書から知り得たものである。隠岐諸島の状況については、近年、柚原恒平ほか『物井横穴墓群—西ノ島・物井地区急傾斜地崩壊対策工事予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』(隠岐島前教育委員会、1995)にまとめられている。上塩冶横穴墓群の場合、6支群例は出雲高校所蔵で、今回実測の機会まで与えていただいた。口径10.4cm、器高3.2cmを測り、底部は丸底で体部がやや直線的に外傾し口縁端部は内側にアクセントをつけて小さく丸みを持たせて終わる。胎土は精緻で、色調は淡紅褐色を呈し、器面調整は外面が体部上半部が横方向にへう磨き、それより下半から底部にかけてはへう磨きとし、内面には放射状暗文を施している(ただし、風化しているため、底部に螺旋状の暗文が施されているかどうかは不明)。20~35支群例は、未報告であるが、林健一・守岡正司氏の教示により、保管された遺物群より確認したものである。
- (5) へう書き文字の検討に当たっては、(1)松本岩雄ほか『岡田山古墳』(島根県教育委員会 1987)、(2)『埴玉稲荷山古墳』(埼玉県教育委員会 1980)、(3)杉谷愛象ほか『陰田—般国道9号バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(米子市教育委員会ほか 1984)、(4)滝口宏監修

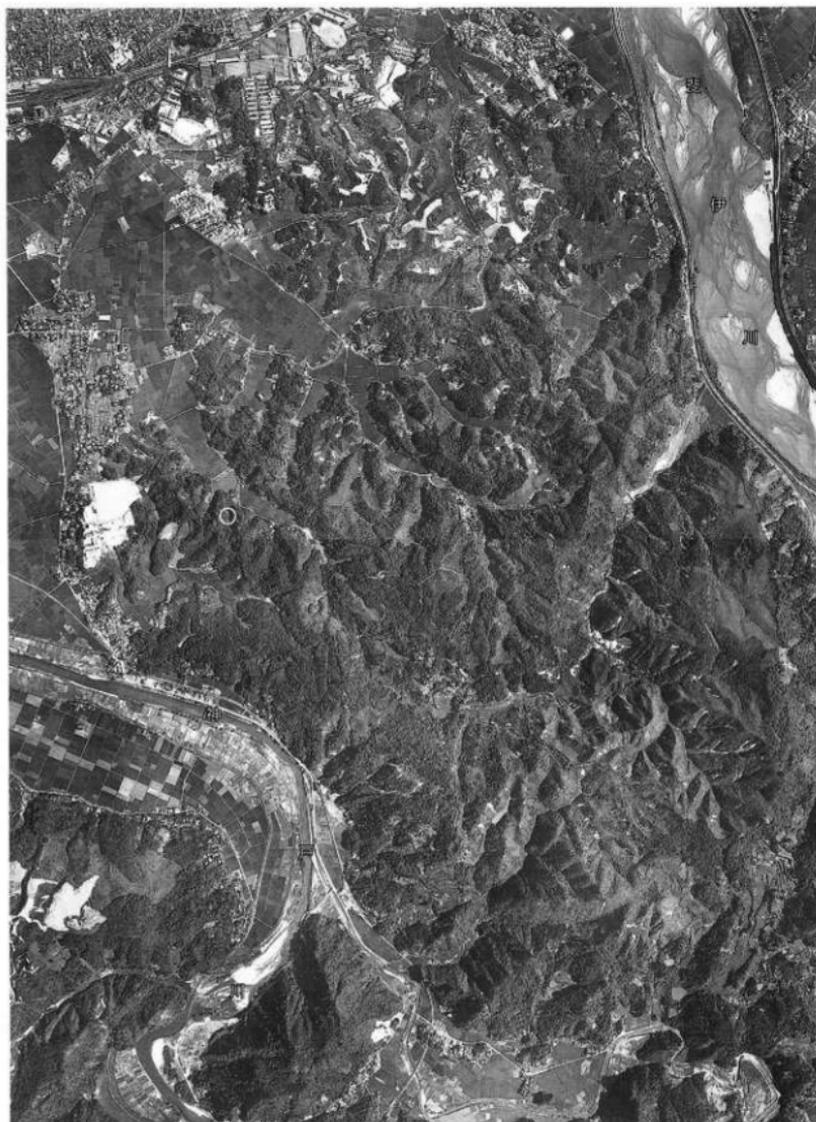
百王賜 銘鉄剣概報—千葉県市原市稲荷台1号墳出土』（市原市教育委員会外（吉川弘文館）1988）、
(5)江田船山古墳編集委員会『江田船山古墳』1890、(6)奈良国立博物館「特別展発掘された古代の在
銘遺宝」1898、(7)奈良国立文化財研究所『平城宮木簡二～奈良国立文化財研究所史料第八冊』1975、
(8)奈良国立文化財研究所『平城京木簡一～長屋王家木簡一～奈良国立文化財研究所史料第四十一冊』
1995、(9)東野治之「稲荷山古墳鉄剣銘を中心とする字音仮名表解説」（『鉄剣の謎と古代日本』、新
潮社、1979）などを参考にさせていただいた。

- (6) 平城宮山上木簡で、額を「額」と表した例には、S K 2101上坑出土の1953号木簡、SK3178堀出
上の2723号木簡（第71図-4）、S D 3155溝上の2762号木簡、S D 4750溝出土の185号木簡があり、
「各」と表した例には、S D 3155溝出土の2762号木簡、S D 1525溝出土の19号木簡、S D 4570溝出土
の186号木簡（第71図-3）がある。また、これらのうちで、「各」を「又」で表した例を強いて挙
げれば、S D 3155溝出土2762号木簡が最も近似していると思われる。これには（表）「各類田部男
龍」（側面）「額田部男龍」とあり、写真図版をみる限りでは第2文字目の「額」の「各」は書き出
しの墨が左下から右上に向かっているように見える。この判読が正しいとすれば、木簡にも「又」
風の各が存在したことになる。

図 版



大井谷石切場跡Ⅱ（部分）



斐伊川放水路開削部周辺の空中写真
(1965年頃撮影、○印が大井谷石切場跡と上塩冶横穴墓群第14～16支群)



大井谷石切場跡と上塩冶横穴墓群第14～16支群およびその周辺の空中写真（白線内が調査範囲）



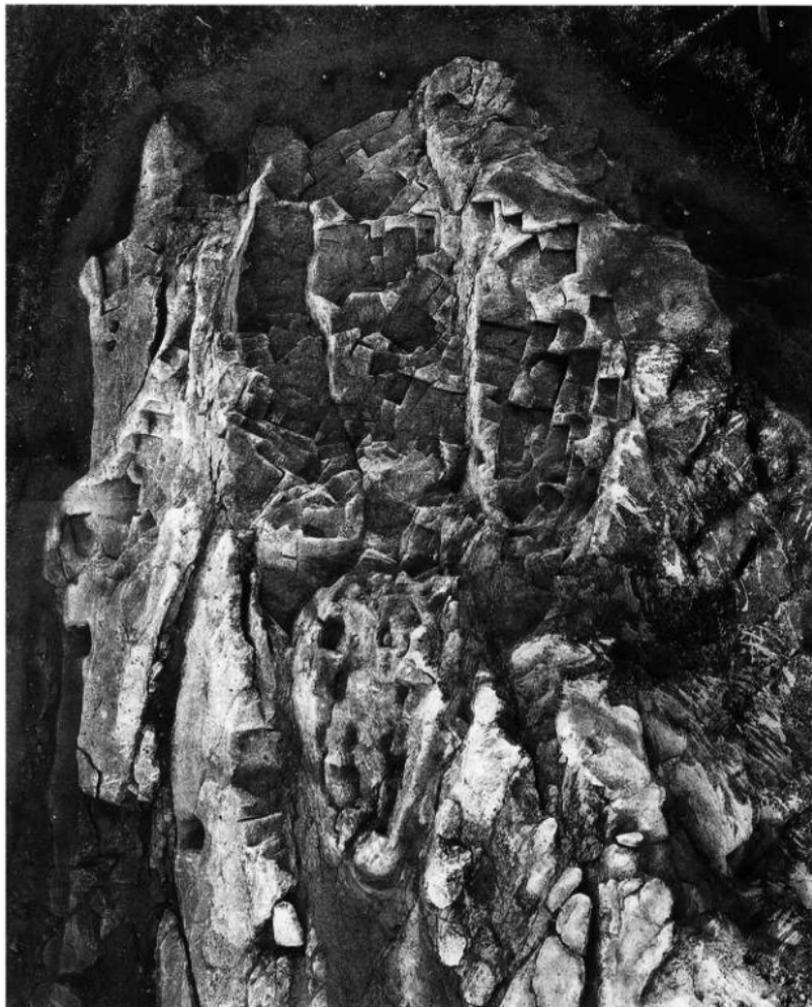
大井谷石切場跡と上塩治横穴墓群第13~17支群の空中写真（ローマ数字は石切場跡）



大井谷石切場跡 1～IVと上塩冶横穴墓群第14・15支群の調査区全景



大井谷石切場跡 I 全景空中写真



大井谷石切場跡Ⅱ全景空中写真



大井谷石切場跡Ⅰ～Ⅳと上塩冶横穴墓群第14支群全景（北西から）



大井谷石切場跡Ⅰ・Ⅱと上塩冶横穴墓群第14支群全景（西から）



大井谷石切場跡Ⅲ・Ⅳ全景（北から）



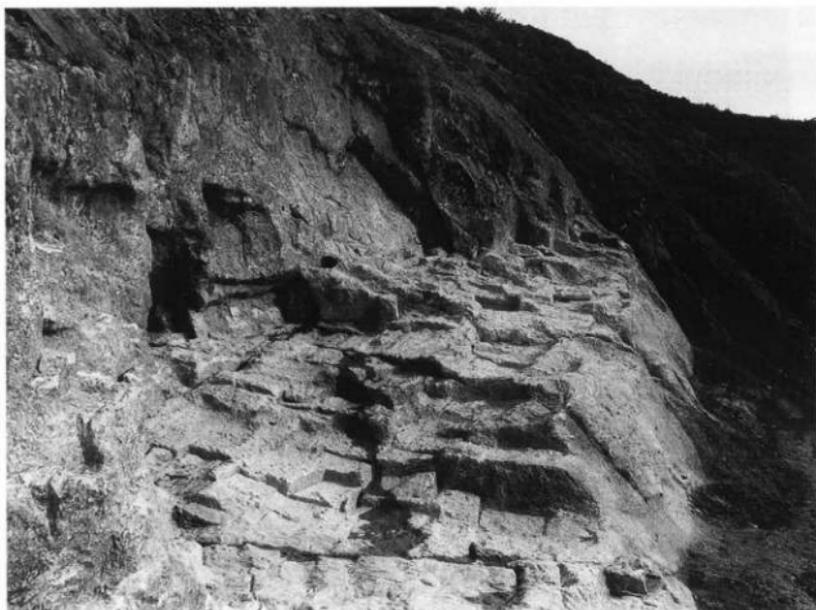
同上遠景（北から）



大井谷石切場跡 I 調査前近景 (北から)



同 上 (南から)



大井谷石切場跡 I 調査後近景 (北から)



同 上 (南から)



大井谷石切場跡 I トレンチ調査 (中央部、西から)



同直下斜面トレンチ調査 (南西から)



大井谷石切場跡Ⅱトレンチ調査（中央部）



同 左（北端部）